



日本を代表する歌といえば「<sup>ふるさと</sup>故郷」が思い出されるのではないのでしょうか。この曲は、大正3年(1914)尋常小学唱歌の第六学年用として発表されました。当時、文部省は作詞者と作曲者を公表しませんでした。平成4年(1992)からは音楽の教科書に、高野辰之作詞、岡野貞一作曲と明記されたといいます。

高野辰之の出身地長野県中野市と、岡野貞一の出身地鳥取県鳥取市にそれぞれ記念碑が建立されています。

一 兎 追 い し 彼 の 山  
小 鮒 釣 り し 彼 の 川  
夢 は 今 も 巡 り て  
忘 れ 難 き 故 郷

二 如 何 に い ま す 父 母  
<sup>つつが</sup>恙 な し や 友 が き  
雨 に 風 に つ け て も  
思 ひ 出 づ る 故 郷

三 志 を 果 た し て  
い つ の 日 に か 歸 ら ん  
山 は 青 き 故 郷  
水 は 清 き 故 郷

唱歌「故郷」は生まれ故郷から遠く離れて学問や勤労に励む人が、子ども時代に駆け巡った野山の風景を遠い地から懐かしむ心情を歌っています。作詞した高野の故郷は、長野県の田舎で、里山が広がり、「彼の山」はそこにある熊坂山、<sup>だいもちやま</sup>大持山、<sup>おおひらやま</sup>大平山、そして「彼の川」は<sup>はん</sup>斑川であるとされています。その野山で冬に備えた野兎狩りをし、川では小鮒を釣った、思い出深い故郷です。父や母はどうしている

だろうか、友人たちは変わりなく無事で達者に暮らしているだろうか。苦しいことがあっても、思い出す故郷。自らの夢を叶え目標を成就させたら、いつの日にか、山青く水清らかな故郷へきつと帰ろう、という懐郷かいきょうの歌です。

## \*\*\* 子どものための歌集は日本独特の音楽文化 \*\*\*

日本では、明治維新後に文部省が音楽の教育をはじめると、西洋音楽の平均律という音階はありませんでした。そこで、明治政府は米国に音楽留学生を派遣、西洋式教育法を習得させ、足踏み式オルガンを使って小学校で音楽教育をはじめました。そこで作り出されたのが『小学唱歌集』でした。歌うことで美しい日本語を身につけさせようと、言葉を精選しました。優れた国語学者、作詞家、音楽家が結集して、外国の曲に歌詞をつけ曲を仕上げました。元歌の歌詞をそのまま訳したもの、元歌を使って新たに日本語の歌詞をつけたものなどさまざまあります。子どもの教育のためだけに体系的に作られた曲集は、外国には見られないといえます。「唱歌」は、外国から新しい音楽を学びそれを発展させた独自の日本文化といわれています。

## \*\*\* 韓国では知られていない日本の「故郷」 \*\*\*

令和6年(2024)2月、韓国・済州国際合唱祭に彩の国プラチナ特別編成合唱団が招待され演奏しました。そのなかで、日本らしさが現われた曲として「故郷」<sup>ふるさと</sup>を選曲しましたが、せっかくなので、三番歌詞を韓国語で歌って楽しんでいただくことを企画しました。(信長貴富編曲『ふるさと 2022 ver.』使用)

日本語から韓国語への翻訳は、特別編成合唱団の代表幹事江川善裕さんを通じ、韓国在住の合唱指揮者Jacob Y M Chang先生にお願いし、なるべく忠実に韓国語に翻訳をしてもらいました。しかし、ネイティブの韓国語を話す方がわれわれの身近におらず、発音の習得にはことのほか苦労しました。とりあえず自分たちが納得するまでにかなりの時間を要してしまいました。それでも、最後まで本当に通じること、大いに不安がありました。

そこで、韓国人が経営する大宮の韓国料理店で歌を披露し、意味がわかるか聞いてもらったところ、曲は知らないが意味はわかったといってくれたのです。それで皆安堵し、自信をもって歌うことができるようになりました。

さらに済州に到着してから、私たちにいつも付き添ってくれた若い韓国人の通訳アンさんに韓国語の歌を聞いてもらったところ、なんと、すべてを日本語の歌詞のとおり翻訳して返してくれました。これで自信满满で本番に臨むことができました。

済州の合唱祭では、心意気だけでなく、ことばもまちがいをなく聴衆に届いたと確信しています。歌い終わったあとに、間髪を入れず反応してくれた韓国のお客様の拍手と歓声が忘れられません。その時の模様は下記にレビューしました。

彩の国プラチナ特別編成合唱団  
第8回済州国際合唱祭招待演奏  
10 スペシャル・コンサート

[https://rkato.sakura.ne.jp/music/sainokuni\\_platina\\_mixed\\_chorus2024-10.pdf](https://rkato.sakura.ne.jp/music/sainokuni_platina_mixed_chorus2024-10.pdf)



日本語歌詩	翻訳韓国語	韓国語(逐語訳)
志を果たして	<b>내모든 뜻을 다이룬후</b> ネモドウン ドッスルウ ダイ룬フ	私のすべて 意を 成し遂げて
いつの日にか歸らん	<b>언젠가 내고향 돌아가리</b> オンジェンガ ネゴヒャン ドラガリ	いつか 私の故郷へ 帰ります
山は青き故郷	<b>나의고향 산천은 항상르고</b> ナエゴヒャン サンチョンヌン ハンサンブルゴ	私の故郷 山と川は いつもどおり
水は清き故郷	<b>내고향 물은 항상맑다</b> ネゴヒャン ムウルン ハンサン マルウダ	私の故郷の 水は いつも清い
忘れ難き故郷	<b>잊을수없는 나의고향</b> イジュッスオオムヌン ナエゴヒャン	忘れられない 私の故郷

### \*\*\* 6人の作曲家の合議で創られた尋常小学唱歌 \*\*\*

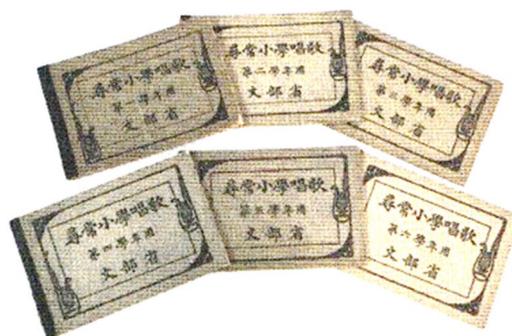
「故郷」の作曲者岡野貞一は、明治11年(1878)2月16日、鳥取県で生まれました。明治28年(1895)、東京高等師範学校附属音楽学校(現東京藝術大学音楽学部)予科に入学、翌年には専修部へ進学しています。音楽学校の先輩には瀧廉太郎がいました。岡野は声楽のほかにピアノ、オルガン、音楽論などを学んでいます。卒業後は研究生として音楽学校に残り、楽典、ピアノ、唱歌を担当しました。

岡野は明治39年(1906)助教授に昇任、その翌年、唱歌編纂員を命じられ校内に設置された唱歌編纂掛のメンバーとなっています。編纂委員には音楽学校の校長、教授陣らの重鎮が居並ぶなか、岡野は若手三番目として作曲委員を担い、提出された新曲120曲の審議においては、委員の前で歌って披露する試唱役を受け持ちました。楽曲担当は岡野を含め6人の作曲家が合議によって作曲するという異例な状態だったようです。

このような背景から、声楽家で音楽学者の安田 寛氏は、著書「唱歌という奇跡 十二の物語—讚美歌と近代化の間で」(平成15年(2003)10月)において、「唱歌『故郷』は、現在一応、高野辰之作詞・岡野貞一作曲ということになっているが、実際は各担当委員のうちの誰の作詞作曲であったかについてはさらに検討を要する。」と述べています。わが国の音楽教育創世記において、上のような紆余曲折を経て、生まれたのが『尋常小学読本唱歌』と『尋常小学唱歌』(全六学年用)となります。



尋常小学読本唱歌  
(明治43年発行)



尋常小学唱歌第一学年用～第六学年用  
(明治44年～大正3年発行)

主な作品の初出一覧

曲名	初出	発行年
春が来た	尋常小学読本唱歌	明治43年
日の丸の旗	尋常小学唱歌第一学年用	明治44年
桃太郎	尋常小学唱歌第一学年用	明治44年
紅葉	尋常小学唱歌第二学年用	明治44年
春の小川	尋常小学唱歌第四学年用	大正元年
朧月夜	尋常小学唱歌第六学年用	大正3年
故郷	尋常小学唱歌第六学年用	大正3年

生誕140周年記念  
岡野貞一資料集  
(平成31年2月15日)より

Back

「音楽／合唱」TOPへ戻る

Home

「ホームページ」表紙へ戻る